

〔対 談〕

**アメリカの教育新事情
と日本**



アメリカの教育

加藤 幸次氏
(上智大学教授)

深谷 昌志氏
(静岡大学教授)

【はじめに】

チーム・ティーチングの開拓者——

加藤 幸次教授という、オープン・コンセプトやチーム・ティーチングを思いおこす。その道の開拓者であることは確かだが、若い頃アメリカに渡り、小学校の教壇に立っていたことはあまり知られていない。教職経験をお持ちであることが、教授の理論を説得力のあるものになっている。そうした加藤教授をお招きして、教室からみた日米の教育事情の比較を行ってみたいと思った。(深谷)

コンピュータが学校を変える

深谷 先生はつい先日、ウィスコンシンから帰国されたばかりですが、あちらの学校の印象的なことといたらどんなことですか。

加藤 コンピュータの導入が進んでいるということです。その影響で学校の体制が変わってきているのではないのでしょうか。小学校でいえば、それぞれの学校が柔軟性を持っているという印象を受けました。

深谷 コンピュータの導入で、個別化が進んだということですか。

加藤 それもありますが、何ととっても内容の大改革ですね。コンピュータがありますので、日本でいう算数、つまり計算中心の算数が大に見直されています。2～3年のうちに、全米の数学教育は大改正になると思いま

す。

深谷 オーバーにいったら、もう掛け算の「九九」はやらなくてもいいということでしょうか。

加藤 そうです。今やアメリカの子どもたちは、みんな計算機を持っています。もちろん従来の、頭で考えて計算することをまったくやっていないわけではないんですが……。小学校5年生の授業では、例えば、この木についている葉は全部で何枚かということを一か月かけてやっています。大きな木から枝を取ってきて類推する。また、家はどんな形でできているかということを学ぶ。丸とか四角とか、三角、それらを全部調べるわけです。英語では“math in contents”。つまり「文脈の中の数学」という概念なんです。わかりやすくいうと「生活の中の数学」という感じですね。

深谷 いわゆる昔の問題解決学習の算数版を実施しているということですね。

加藤 おっしゃる通りです。一般的に言えば考える力、昔の言葉でいえば問題解決力です。まさに“thinking”が大切なんです。もっとも日本の新学力観も、もとはアメリカを見習ったものなんです。アメリカは「知識はみんなマッキントッシュに入っているのだから、人間は考える」という考えです。特に私のいたウィスコンシンは大学の街で、その方面では進んでいますので、このような教育の実践者が多かったと思います。

新事情と日本

深谷 特に⁽¹⁾“back to basic”といわれはじめてから、私が見てきた学校の印象ですと、一斉授業が増えているとか、小テストをかなりやっているとか、つまり昔のアメリカの学校のよさがなくなってきてしまっているという気がします……。

加藤 私もそう思います。しかし、“基礎に帰れ”運動は大体1985年くらいがピークで、90年代に入ってから、もうそんなことをいう人はいません。ただし今日、少し形を変えて“文化的リテラシー (cultural literacy)”という表現で残ってはいますが。

深谷 少し話は変わりますが、一口にパソコンの導入とはいいますが、予算的に大変ですね。

加藤 ところがアメリカでは、どんなに田舎でも幼稚園から小学校、大学までコンピュータがあって、しかも専門の指導者がついているのです。日本でもコンピュータが入っていますし、テレビも入っている。教材教具、つまりソフトの量もそんなに変わらないと思いますが、違いはアメリカではそうしたソフト類を非常に頻繁に使うということです。テープなど日本では視聴覚準備室に眠っているケースも多いと聞きますが、あちらでは競争で使っています。その違いは大きいですね。

深谷 あちらでは自分たちの街の学校という意識が強いですから、必要であれば財政的に少々苦しくても何とかするという事なんでしょうね。

新しい教育の流れと教師の対応

深谷 ところで先生方はパソコンを使えると給料が上がるのですか。

加藤 そんなことはありません。アメリカには昔からタイプライターがありましたし、キーボードの操作には慣れています。その意味では教師たるもの、パソコンやワープロができないという人はいないと思います。そういうものに適応できない人は、教師にはなっていないという言い方もできるのではないのでしょうか。

深谷 教師は新しい教育の流れについていかなるをえないということですか。

加藤 学校全体が、ついていかなければならないという体質です。

深谷 万一、ついていけない場合はどうなるのですか。

加藤 やめるしかないでしょうね。もっとも⁽²⁾テニユア（常勤契約）が取れるまでの数年の間に、うまく適用できない人は教師をやめていきます。なぜかというとアメリカでは教師には人事異動がほとんどありませんし、別の学区の学校にかわりたい場合は、新たに試験を受けなければならないのです。同じ学区内での異動もあまりありません。つまり校長は20年近く同じ学校で校長をやるわけですし、先生方も3年生の担任だったら3年生をずっとやっていくわけです。ですから校長を含め

加藤幸次氏



た学校全体の体質についていくか、やめるしかないのです。

深谷 そんなに異動が少ないのですか。

加藤 異動は原則的に不可能ですね。そのテニユアに入ってしまったら、行きたい学区の学校のテストに受からなければ異動できません。もっとも校長がかわると先生もかわるということもあります。校長先生は自分の気に入っている教師を集めますし、その反対に校長の考えに合わない人が外に出ていくということもあります。

深谷 ということは、日本のように担任ごと持ち上がっていくということにはならないわけですね。

加藤 なりませんね。それは面白い点ですね。それぞれいい点もあるのですが、日本はともかくクラスの先生は絶対的で偉いという設定です。付属で1年から6年までずっと受け持った先生が、子どもが自分に似てきたとおっしゃったのを聞いたことがあります。これも教師は絶対にいいという考え方が背後にあるからだと思います。

深谷 そうでしょうね。

加藤 ところがアメリカは、子どもはいろいろな専門家に会った方がいいという考え方なんですね。

深谷 先生は若い頃アメリカにおられて、小学校で2年間教えていたとお聞きしていますが、やはり同じ学年を受け持たれたのですか。

加藤 もちろんです。5年生を2回やってまいりました。

深谷 そうしますと、担当学年の教材には相当詳しくなりますね。

加藤 日本の場合は国家的な共通のカリキュラムがありますから、例えば6年生の担任の先生が急に1年生にきてもやれるという体制なのです。逆にいえば、このカリキュラムがなくなったらやっていけないということです。あちらではカリキュラムというのは原則的に学区とか学校で持っていますし、それを支えているのは教師集団が非常に固定的なことなのです。

学校や先生の選択が自由

深谷 そうなってくると学級集団というのは毎年かわってくるんですか。

加藤 学級というのはもちろんかわります。しかし新しい学級担任はまだ仮の学級担任なんですね。ですから不都合なことや意見があったらいつてきてくださいというわけです。実際に新学期が始まってから学級をかわるということは大いにあります。つまり、学校や先生の選択ができますから、親は学校や先生への意見をどんどんいいます。

深谷 意見や文句は誰にいうのですか。

加藤 大体は校長です。もちろん本人にもいいます。ですから、ある先生は親から担任の希望がたくさんあって、ある先生は少ないということもあります。

深谷 そういう場合どうするんですか。

加藤 ソーシャルワーカーが適当に調整します。人気のある先生の評判は広まりますが、評判は悪くても生徒によってはその先生が合うという場合もあります。もちろん自分は人気がないというのは反省材料にはなりますし、そういう教師間の厳しさはありますね。

深谷 それが1年間続くわけですか。かなり厳しいですね。

加藤 先ほど申しましたように、先生が簡単に転動できるというシステムはありませんから、評判のいい先生の名声はどんどん上がります。一方、評判のあまり芳しくない先生の

人気はますます低くなります。そこで評判の低い先生は、自分の教育方針をまとめて父母に配るのです。「私は教え方が厳しいし、宿題もたくさん出す」というようにです。すると父母の中にはこうした教育方針に賛成する人もいるわけです。

日本の場合ですと、親の間で今度の担任は「はずれ」などといわれても、本人は自分はいい先生だと思っている場合がありますし、「はずれ」の意味も永遠にわかりません。しかしアメリカでは、自分のどこが悪いのか、どんどん伝わってくるのです。

深谷 アメリカでは学校の選択、教師の選択ということがごく普通になってきているんですね。

加藤 娘の例ですと、2つの学校の選択肢がありました。結局、伝統的な教育方針の学校に進んだのですが、もう1つは「調べ学習」が中心の、つまり何でも自分が中心で調べていくことが方針という「21世紀を目指す学校」というのがキャッチフレーズの学校でした。

深谷 そういうことはスクールガイドか何かに掲載しているのですか。

加藤 3月にはスクールガイドが配られ、学校の選択ができるようになっていきます。ですから志望する学校を、親子でじっくり見学して決めるわけです。

深谷 エリアの中に中学校は2つしかなかったのですか。

加藤 いいえ。ミルウォーキーの場合はだいたい15~16の小学校が1つの学区になっています。その中から自分の好きな学校が選べるのです。学校は例えば、「当校は進学に強い」とか「うちは環境教育が得意」などと、それぞれの特徴を出さなければなりません。親は6月の夏休み前には学校を決定します。親の姿勢としては、自分たちの税金で学校を運営しているのだから、意見をいって当然だと思っています。ですから学校は大変な努力をしなければならないのです。

深谷 親はまず学校をチョイスして、その次



深谷昌志氏

に担任をチョイスするわけですね。

加藤 担任は学校に比べて自由には選べません。しかし調整的な選択は結構できるようです。

理想的な先生と親、 先生と子どもの関係

深谷 アメリカでは小学校の場合、教科担任ですか。

加藤 原則として全教科担任です。

深谷 全教科ですか。

加藤 ただコンピュータだとか、音楽などは専科の教師です。これは日本に近いですね。また同じ5年生の先生でも、お一人でやっているケースもありますし、チームを組んで教えている場合もあります。そのやり方も、伝統的にやっている人もいますし、オープン的にやっている人もいます。そしてそれを親が選ぶのです。親はよく知っています。しょっちゅう授業を見にきますし評判もあります。親によってどの先生がいいか考え方が違いますね。つまりそれは、親の教育方針がしっかりしていないと学校や先生を選択できないということなのです。その点、日本の親は学校に任せっきりですね。もっとも、今までお話ししてきたことは平均的なアメリカの話であって、大都市の問題のある地域になりますと親も教育に関心がなかったり、学校任せということも多いというのも否定できないでしょう。しかしアメリカの教育のいいところ

は、とにかく自分たちの税金でやっているんだという意識の高さです。そういう感覚の中で、先生と親、先生と子どもとの関係が理想を求めて動いているように思えます。

深谷 アメリカの教育は成り立つ頃から大体そういう形で運営されていたのでしょうか。

加藤 そうだと思います。当初は住民が自分たちで先生をやとったわけです。教育委員会のメンバーも初めから選挙で選んだのではなくて、適任と思われる人を地元の名士などが面接して任命したわけです。今世紀に入って教育委員会制度がしっかりできると選挙も必要になってきましたが、基本的な性格は変わっていないように思えます。

深谷 アメリカの先生に、ご専門は何ですかと聞くと、必ず何年生ですという答えが返っ

加藤幸次（かとう・ゆきつぐ）氏 プロフィール

1937年愛知県生まれ。愛知学芸大学卒、名古屋大学大学院・ウィスコンシン大学大学院修了、国立教育研究所室長を経て現在上智大学文学部教育学科教授。

主な著書『個別化教育入門』1982年、教育開発研究所。『一斉画一授業改革の提案』1985年、『個別化・個性化実践に学ぶ』〈小学校編〉〈中学校編〉1985年、『オープン・スペースの活用シリーズ』3巻1987年、『個別化・個性化教育はどこに向かうべきか』1995年、以上明治図書。『個別化・個性化教育の理論』1985年、『ティーム・ティーチングの考え方・進め方』1993年、以上黎明書房。『オープンスクールの挑戦・学校を開く』1987年、『個性を生かす学習環境づくり』1989年、『学力と個性の間』1990年、以上ぎょうせい。『個性を生かす先生』1989年、『ティーム・ティーチングを生かす先生』1994年、以上図書文化。『個性と自己教育力の育成をめざす授業実践の改革』1991年、第一法規。『個性化教育ハンドブック』1992年、学陽書房。

てきますね。

加藤 そうですね。つまり教師の専門性を象徴しているということでしょうか。教師の専門性ということでは、アメリカの教師は自分だけの独自の教材をたくさん持っているんです。そして学校を移るときは、この教材を全部持って引っ越します。ですから学年の初日からすぐ授業が始められるというわけです。

深谷 ところでアメリカでは、校長先生が意外に若いんですね。

加藤 ウィスコンシンの場合ですと、校長になるには教職3年以上の経験と、大学院で教育行政の修士あるいは博士コースを修了していなければなりません。最短コースでいけば26~27歳で校長の資格が取得できます。

深谷 つまり、博士号がないと校長にはなれないというわけですね。

加藤 まあ原則ですね。ですから教師をしながら10年も15年もかけて博士号をとる。だいたい30歳から35歳で担任教師であるか、校長を目指すかを選択しているようです。もっとも日本のように権限が校長に集中してはいませんので、先生がみんな校長になりたいわけではありません。アメリカでは権力が分散していて、クラス担任にも力があります。例えば、クラスを見学させてほしいと申し出て校長がOKを出しても、担任がNOと言ったらそれまでです。つまり学校の基本的な方針などは校長の管理下にありますが、一方では個々のクラスのことは各担任にあるというわけです。責任体制というか、これも専門性の1つのあり方でしょうね。

アメリカの教師の給料は日本の半分

深谷 私はわりとアメリカの学校が好きなのですから、何ごとにおいてもつい褒めてしまうのですが、今、アメリカの学校で何が一番の問題なのでしょう。

加藤 給料ですね。私はアメリカでも公言していますし、『ニューズウィーク』にもそういうことを書きました。

深谷 給料が安いということですか。

加藤 安すぎます。おそらく日本の教師の半分程度でしょう。ですから、一人前の仕事にならない。私もアメリカに長くいるとしたら教育を自分の専攻にはしたくないと思いますね。

深谷 もともとアメリカでは教育学部は評判がよくないということをお聞きですけど……。

加藤 それはやはり給料がからんでいると思います。特に教育学部を出て教師になっても給料は他の学部出身者の半分です。これではいい人材が集まるはずがありません。アメリカは地方分権ですし、しかも地方の教育委員会にお金がありませんから給料を上げられない。給料を上げると地域の固定資産税も上がるので、地域の投票なくしては勝手に給料を上げられないという仕組みになっているのです。その点、日本の場合は中央集権ですし、「教育は100年の計」というようないい意味での儒教の精神がありますし、恵まれた環境にありますね。とはいえ、アメリカの場合は安い給料で一生懸命やっている教師が実に多いというのは感心しますね。

深谷 アメリカの先生方をみていると、非常にまじめで、アメリカのよさというのを感じますね。

加藤 原則的には非常に子ども好き、教育好きの人が残る制度であることは確かですね。いやいややっていたら動まりません。

深谷 今日は主にアメリカの新しい事情をお聞きしようと思ったのですが、先生は日本で新しい動きをお始めになったとか。

加藤 チーム・ティーチングにかかわってきています。従来はクラスを学級担任に預けて全部見させるという、つまり責任をすべて学級担任に持たせてやるという体制でずっとやってきました。これは先生が極端に言えばあらゆることに力があって、いい先生という前提で明治以後やってきたと思いますが、そのことに対しての反省があるのではないかと思います。これは教師と生徒とのミスマッチの問題です。このミスマッチというテーマ

が実はアメリカでも研究の1つで、特に高校における生徒と教師のミスマッチの問題が、ここ5、8年の大きなテーマになっています。やはりここは反省があるのではないのでしょうか。そうした反省から、子どもの要求と教師やカリキュラムとのミスマッチというのをもっと見てやらないといけないのではないかと、そういった動きを始めたわけです。

深谷 実験学校みたいなことをお始めになったとか。

加藤 これから学校をつくろうという段階です。小規模な私立の小学校をつくって、私たちが目指してきた個性化教育の実験学校にしたいのです。もちろん、オープン・スクールです。

学級という枠を はずすことからスタート

深谷 先生がお考えになっていた加配の使われ方と、現場とはかなり違っていたのではないのでしょうか。

加藤 私たちがやろうとしているのは、教師が2人いて、1人がメインで他の1人が補助というチーム・ティーチングを減らすということです。チーム・ティーチングのために先生を増やす場合、傾斜加配と一律加配の2つのパターンがありますが、現実には自分のところは個を生かす指導をやる気はないんだけど、一律加配によって1人来てしまったというケースもあります。特に中学校はひどくて、そこがミスマッチしておりまして、法律の制度とか行政のあり方からすると止むを得ないのかなと思っていますが、本来はそういう学校には加配教師を配置すべきではないのです。

深谷 その2人組ですが、日本ではまだまだメインティーチャーとサブティーチャーといった見方が強いという気がするのですが…。

加藤 それは結局今の校舎建築が、あるいは今の先生方の考え方が学級中心だからそうなってしまうんですね。そういうところは学級担任がいます。中学校でも教科担任がいま

すよね。そこから入って来ますから、その入った人の平等がなかなか確保できないのです。しかし、2学級を解体して3人でやる、3学級を4人でみるようにすれば平等に組めるし、そのような問題はなくなるわけです。

深谷 つまり学級という枠を外さないとうまくいかないということですね。

加藤 原則的にはですね。それからもちろん学級の中でこういうこともあります。例えば、数学を専攻してきた人が加配教師としてきたときに、自分は大学のとき専攻は社会科だとか美術だから数学の指導については、むしろ加配教師をメインに立てて自分はアシスタント的にまわるということが考えられます。原則的には1つの学級に2人入ったときに算数科なんかの場合ですと、主と副という感じになってしまいます。これがもし社会科や生活科などで課題選択学習を行うとしますと、これはかなり平等のモデルが使えるわけです。

例えば生活科で「秋に遊ぼう」という単元のとき、1人の先生は葉っぱを中心とした造形でいく、もう1人の先生は実を使ってコマを作るというように課題を担当します。そこには教師の間の平等性が確保されます。しかし算数科はどうしても主・副の関係になりがちです。もう1つは学年中心のチーム・ティーチングですね。そういうふうに学級から学年や教科に広げていって、その中で先生方の特性を活用することが大事なのではないかと思います。

深谷 先生方に意識を変えていただかないとやれないということですね。

加藤 自分のクラスは自分がすべて見るという体制は危険です。そのような意識を変えなければなりません。「学級王国」「自分はオールマイティー」という考えでは、主・副の構造しかとれません。

深谷 「学級王国」というのは明治の時代にはあれしか手がなかったと思うんですよね。21世紀を目前にして、「学級王国」というのは多様化した時代には無理だろうという気が

しますが……。

加藤 おっしゃる通り多元化だとか多様化とか個性化とか、時代がそういう方向に進んでいるとき、子どもの側、つまり教育を受ける側からすれば、なるべく多くの領域の専門家から学ぶことが望ましいわけです。そして地域や他の先生も加わって、学校の閉鎖性をなくし、先生と子どものミスマッチをどう解決するかが、今後の課題だろうと思います。

深谷 本日は貴重なお話を、ありがとうございました。

【対談を終えて】

教師論を考える素材に

加藤教授によれば、アメリカの教師は特定の小学校の特定学年を何十年と担任しているという。原則として学年持ち上がりで、同一校は数年以内という形が定着している日本からすると、それで教育が成り立つのかと思う。その他にも、教材編成についての考え方や教育機器の導入など、耳新しい話が多かった。

アメリカの教育がベストという気持ちはないが、教師論を考えるための素材として、加藤教授の問いかけた問題を受け止め、それぞれが解答を出してほしいと思った。

(1) back to basic=アメリカ教育界のスローガン。「基礎学力を大事にしよう」という意味。

(2) テニユア(常勤契約)=アメリカでは小中学校に限らず、大学では初めは半年度契約で、その後テニユアが取れると、原則として、継続勤務の資格がもらえる。

文献紹介

『個別化・個性化教育はどこに向かうべきか』

加藤幸次著『個別化・個性化教育はどこに向かうべきか』（明治図書出版）から「私たちはどこにいて、さらにどこに進もうとしているのか」（p. 78～p. 93）を抜粋しました。

私たちはどこにいて、さらにどこに進もうとしているのか

3つの「いい子像」を克服する

私たちは「帰納的なアプローチ」を取って進んできたグループです。まず、なにより目前にある毎日の授業を改革しようとしてきました。次に授業を改革しようとする、私たちには当然と思われるのですが、授業を取り囲んでいる諸条件——学校のあり方——を問題にせざるを得ませんでした。

と同時に、これまた自然な成り行きですが、授業や学校のあり方の背後にある「考え方」をも問題にせざるを得なくなったのです。そもそも私たちは「子ども」というものをどう捉えているのか。また、私たちは子どもをどの程度信頼しているのか。一体学校のはたすべき役割はなにか。21世紀に生活する人間とはどんな人間であるべきなのか。私たちの研究と実践はどこに位置づいているのか。こうした根本的な問いが必然的に生じ、対応に迫られてきたのだと思います。

第一に、ここでは、私たちは一体「子ども」というものをどう捉えてきたか、という根本的な問いについて考えてみたいのです。もちろん、私たちとは教師のことです。あるいはごく一般的な親と言ってもいいと思うのです。なぜなら、むしろ意識せずに私たちはそこに向かって子どもを導いているにちがいないからです。

明治時代以来の近代公教育は、明らかに3つの「いい子像」に導かれてきたと言っていでしょう。1つは「速くて正確にできる子」というイメージです。今のテストを考え

ればこのことは自明です。結局、45分なり50分で100点満点取れる子が「5」なのです。もちろん、その頂点にあるものは高校入試ですし、大学入試です。一定の受験時間の中で満点に近い点を取った学生から順に入学が許可されていくのです。まさに、偏差値体制です。たった1回のペーパー・テストで自分の運命が決まってしまうとなれば、それは真剣にならざるを得ないのです。

いわゆる有名進学塾で勉強している子どもたちを観察しているととても興味深いのですが、子どもたちは常に「速く速く解く」ように訓練されているのです。手がふるえているのです。

しかし、他方「時間はかかるけど正確に解ける」子どもはどこがいけないのでしょうか。今のテストでは「3」も取れないのです。しかし、「時間がかかること」はそんなに否定されるべきでしょうか。ここでもくり返しますが、私たちのグループは子どもは一人ひとり自分の学習ペースというものをもっている、と考えてきているのです。このことが一般的に認められていないのです。それでは学年制が崩れてしまうと言われそうですが、無学年制的発想を取り入れればよいのではないのでしょうか。

近代公教育を導いてきているのは、あらゆる分野で「効率主義」という原理です。「1学級50人」「大規模学校」「教科書、黒板とチョーク体制」など、学校教育の隅々まで「効率主義」の原理が通っているのです。「速くて正確」といういい子像はここから来てい

るのです。「ゆっくりで正確」な子は「のろま」で「お笑い」の対象になりかねないのです。

しかも、「速くて正確なこと」をめぐる、順列化がはかられてきているのです。なににごとも「1番、1番」と順序を気にする教師、もちろん、子どものいかに多いことか。

他の1つは「オール5」というイメージです。このことは今の通知表を考えれば自明です。どの教科も「5」が最高で、すべての教科で「5」の取れる子どもが最優秀なのです。多分、どこの県でも高校入試には内申書における各教科の総合点を活用していると思われるのです。中学校ですから9教科として総合点は45点です。当然、この総合点が高い子から入学が許可されていくはずですが。

一体「オール・ラウンド」な人間というものはどんな人間でしょうか、そもそもなににごとも優れているといった怪物のような人間がいるのでしょうか。神話の世界のことでしょう。人間は強いところもあれば弱いところもあるのが普通でしょう。得意なこともある、不得意なこともあるというのが普通でしょう。不思議なことに学校教育ではこの「オール5」というイメージが原理とさえなっているのです。

私たちのグループは、ここでもくり返しますが、子どもたち一人ひとり自分なりの興味や関心をもっている、と考えてきているのです。このことが、また、一般に認められていないのです。したがって、常に学級で「共通課題」に挑むべきだと考えられているのです。グループごとに、あるいは、一人ひとり「違った課題」に挑戦するということは考えられないのです。このようにして個性なき人間がつくられてきているのです。

最後の1つは「よく指示に従う子」というイメージです。このことは学校のすべての場で容易に見られることです。なにより、ここでもくり返しますが、伝統的な一斉授業は教師の指示と発問で進んでいくのです。教師の指示なしに一切のことができないのです。強い言い方ですが、いったん学校に入ったら子

どもは「指示に従わねばならない」のです。当然でしょう。さもなければ、学校は運営できないし、一斉授業は成り立たなくなってしまうからです。

よく教師の指示に従って、「宿題をやってくる子」、「忘れ物をしない子」「最後までやりとげられる子」が良い子なのです。教師にとって指示通りきちんと出来る子は理想的です。やりやすいのです。ふざけていたり、自分勝手をしていて指示に従わない子は悪い子なのです。やりにくい子なのです。したがって、叱らねばならない子です。通知表には「行動の記録」の欄があって、ここで評定するのです。

本当におもしろいとさえ言えるのですが、親は子どもを見送るとき、「先生の言うことをよく聞くんだよ」と言ってきたものです。そうしない、学校でうまくやれないことを親はよく知っているからです。

多分、私たちが無意識のうちにもっている——潜在的カリキュラムですが——「いい子像」はこの3つに要約できると思うのです。このイメージをどのように克服していくのか、今日私たちに課せられた大きな課題でしょう。

子どもの「意欲や関心」に基礎を置く

以上3つの「いい子像」の示しているものは、学校——もちろん、その中心は授業ですが——という場が強い言い方をすると、子どもたちにとって「抑圧の場」になっているということでしょう。子どもは静かにして教師の指示にきちんと応え、しかもすべての分野で速く正確に出来れば最高なのです。自分の考えていることを指示もなしに言ったり、まして、自分の考えに従って行動を起こしたりしては「だめ」なのです。

一体、こうした「抑圧の場」にあって育てられる主体性とか自主性とはどんなものでしょうか。大いに考える必要があるのです。せいぜい教師の指示に従って「最後までやる」力とか、「宿題をきちんとやってくる」力といったことでしょう。それは、あくまで

も、一定のわく内での、消極的な主体性・自主性と言いたいのです。多分、子どものうちは「それでいいのだ」という論がありそうです。しかし、少なくとも一部はわくの取れた、積極的な主体性・自主性の育成をめざすべきではないでしょうか。

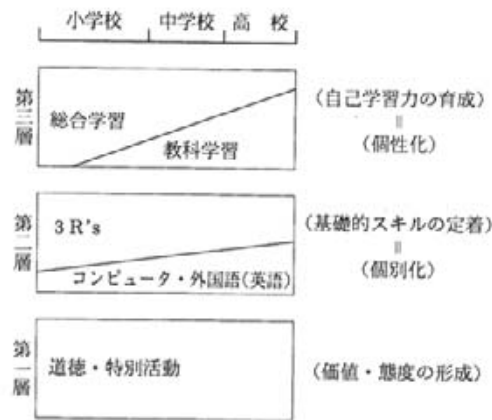
私たちも学校は教師の指示を中心に運営されていてもいいと思いますが、しかし、教師の指示なしで子どもたちが行動できる場面もつくっておく必要がある、と考えているのです。さらに、指示のあり方を「支援」に変えていくべきだと考えているのです。

第二に、私たちは子どもをどの程度信頼しているのか、という問題を考えてみたいのです。今までの授業は教師の側ですべて用意してきたとって過言ではないでしょうか。したがって、子どもの主体性や自主性を育てるために重要なことは、学習活動を子どもたちの意欲や関心に基礎を置いて組み立て直すことではないでしょうか。別な言葉でいうと、子どもたちの「内から湧き出てくるもの」をベースにどこまで学習活動が組めるかということなのです。

教科というものは社会あるいは教師の側の要求によって構成されているものです。あるいは、科学や学問の体系のもとに構成されているものと言っているでしょう。それに対して子どもの「内から湧き出てくるもの」は教科という社会あるいは教師の側で構成したものと、必ずしも、うまくマッチするものではないのです。ここが大きな問題です。子どもたちが意欲や関心をもつものは教科的というよりは、「総合的」なものでしょう。もちろん、教科のわく組みの中にあって子どもの意欲や関心とうまくマッチする学習内容もあるわけです。さらに、学年段階が高くなるにつれて、「内から湧き出てくるもの」は科学的かつ学問的に変化していくことも考えられます。

他方、3アールズ——読み・書き・計算する力——やコンピュータや外国語は、その子なりの学習ペースは充分認めるとしても、

〈三層構成のカリキュラム〉



すべての子どもに習得してほしい「基礎的スキル」ではないか、と考えています。これらの学習内容は子どもの「内から湧き出てくるもの」というより社会や教師の側から学んでほしい内容として、子どもに要求するものでしょう。このことは一定の価値・態度についてもいえることでしょう。

子どもが主体的にかつ自主的に活動するためにも、基礎的なスキルとして3アールズは不可欠ですし、一定の価値・態度も身につけてほしいのです。こうした基礎的スキルや価値・態度こそ自ら学習して行くための基礎的条件ではないでしょうか。

私たちは学校のカリキュラムをこのように三層の構造にとらえて考えてきています。第一層は基礎となる層ですが、第二層は社会あるいは教師の側で要求していく学習内容であり、子どもの意欲や関心から少し遠い位置にあるものです。実は私たちはこの層に「指導の個別化」という概念を与えてきたのです。この第二層の上に第三層が位置するわけで、ここでは、子どもたちを完全に信頼して、子どもの意欲や関心を十分に生かした学習内容や活動にしたいのです。この層に私たちは「学習の個性化」という概念を与えてきたのです。

子どもたちを「抑圧の場」から解放し、子どもの「内から湧き出るもの」に基礎を置こうとするとき、このように三層のカリキュラ

ムが創造できる、と私たちは考えてきたのです。やはり学校は一定の価値や態度の形成に責任をもっていますし、3アールズに代表される基礎的なスキルを子どもたちに習得させることに責任をもっている、と考えるべきでしょう。その上に立って、子どもたちを完全に信頼して、「自己学習力」、「自ら学ぶ力」、「問題解決力」と言った能力の育成をめざすべきでしょう。

「個が育つ」学校に変える

第三に、一体学校のはたすべき役割はなにか、ということを改めて考えてみたいのです。

明治時代以来、公立学校の役割は「知識や技能の伝達」と「国民としての価値と態度の形成」にあった、と言って言い過ぎではないと思います。後発国として西洋に向かって開国したわが国はよく知られるように、「富国強兵」政策をとってきたのです。時代は世界史にあって帝国主義時代にあり、西洋諸国のアフリカ及びアジアの分割統治が進んでいったのです。後発国としてわが国もまた西洋列強に伍していかなければならず、「富国強兵」策はそのための手段だったのです。

学校に課せられた役割は優れた西洋の科学技術文明に「追いつき追い越す」ために、効率よく知識や技術を国民に伝達することであり、さらに、国民国家の形成者としての一定の価値と態度を身につけさせることであったのです。わが国の学校程早く、かつ効果的にこの役割を達成した国家はない、と言っていいでしょう。よく知られていることですので、くり返すことはありませんが、明治5年の「学制」の施行、明治23年の「教育勅語」の公布はその代表的な事例です。

実は、この学校の役割は第二次世界大戦後も変化していない、と私は考えているのです。「富国強兵」に代わって「富国強商」に変わったくらいのことです。強い兵隊をつくる代わりに、強い商工業者——主に工場や商社に働く人々——をつくってきた、と言えるのです。たしかに、民主主義の洗礼を受けま

したが、「国民を富ます」という目的は手段を変えただけと言っていいでしょう。

しかし、1980年代に入ると、この目的は達成されたかに見え始めたのです。今や世界で、疑いもなく、最も物質的な豊かさを享受している国になりました。円の強さがこのことを物語っています。

そうしてみると、改めて、学校の果たすべき役割はなになのか、考えてみなくてはならない時代を迎えたのです。結論的に言って、「個性尊重」「新しい学力」「自己教育力」などと言われる“新しい”言葉に代表される学力をめざすことが学校の役割であると認識され始めたのです。また、「国際人」の育成に代表されるような態度の形成も学校の役割に加えられつつあるのです。考え直してみると、学校の役割は個人的な「学ぶ力」の育成や「国際的」な態度の形成に大きく変化しようとしてきているのです。

私たちはこのことに最初から気づいてきたつもりです。20世紀の第四半世紀に活躍してきたグループとして自負してよいと思います。

2つのことを考えておきたいと思います。1つは教育における「目的と手段」とのかかわりについてです。すなわち、イギリスの産業革命期——1780年頃から1830年頃——に始まり、第二次産業革命期あるいは帝国主義時代——19世紀後半から20世紀の前半——に制度化されていった近代公立学校は国家の繁栄のための「手段」と考えられてきたのです。どこの国家を取っても、国家の繁栄が「目的」であって、学校はそのための「手段」と化してきたのです。このことは戦後の「富国強商」の時代になっても、いや今日でも、変わらない姿です。人々の頭の中には、もちろん、教師の頭の中にはこの構図が強くプリントされているのです。

しかし、新しい時代を迎えて、この構図を修正しなければならないと考えているのです。もちろん、私たちも経済生活を、政治にかかわらねばなりません。その意味で

この構図を一転して見直すことは無理があるでしょう。しかし、構図の一部は次のように修正すべきです。すなわち、学校は「新しい学力」に代表されるような個人的な力や1人の人間としての「人格の完成」をめざすべきです。この目的は直接、経済的、あるいは政治的なものではなく、きわめて個人的なものなのです。学校の目的は、「学校の内」にあるのであって、「外」に置かない構図が出始めてきたのです。それは「人間の形成」というきわめてインタナショナルな構図です。

1980年以後の学校教育をめぐる構図は、この個人的な力や「人格の完成」という学校教育の「内なる目的」が経済的、政治的な「外なる目的」と、よく吟味されているのかどうか知りませんが、一致しているところに成り立っているのです。別な言い方をすると、経済的、政治的利益にとっても「個人的な、内的なもの」が役立つ、と認識され始めていると言っているでしょう。きわめて、大きな転換です。

他の1つは、「教師の役割」をめぐることで、今日ではよく知られていることですが、教師は教授者あるいは指導者というよりは、子どもたちの学習を「援助」したり、「支援」したりする役割を担うべきである、と変わってきています。実際の授業は相変わらず教師中心の「一斉授業」であるとしても、言葉の上では援助者あるいは支援者というあり

方が強調されてきているのです。

当然のことですが、西洋の科学技術文明に「追いつき追い越す」体制のもとにあって、教師はいかに効率的に知識や技能を伝達するかに腐心してきたのです。しかし、改めて、「新しい”学力——自己教育力、自己学習力、自ら学ぶ力など——が強調されてみると、教師の役割は当然、子どもたちの学習を援助したり、支援したりすることにならざるを得ないのです。

第2章でふれましたが、正に「立つな、話すな、整えよ」です。私たちはそのために「1人遊び」という学習活動に基礎を置いた授業をつくってきたつもりです。子どもたちは1人で、あるいは、小グループで豊かな学習環境と相互作用をくり返しながら自らの学習課題に挑戦していくのです。そこでは、教師は学習の「組織者」であり、「促進者」であり、かつ、「個別指導」を施す人間であるのです。黒板の前に立って、子どもたちに指示や発問をとばしたりする人間ではないのです。

何度も何度もくり返し述べておきたいのですが、集団の教育力は重要です。特に「話し合い活動」は重要です。すべて「1人学び」であることはないのです。自分の考えを聞いてもらい、他人の考えを聞いてこそ学習活動は進むのです。全く1人で学習は成立するものではないのです。したがって、一斉学習もまた大切にしていきたいのです。

単位：パーセント

ちゅうさのおねがい

これはテストではありませんので、思ったとおりに教えてください。
まず、やりかたの練習をしましょう。

●やりかたの練習●

あなたはカレーライスがすきですか？

とても すき	かなり すき	ふつう	すこし きらい	とても きらい
1	②	3	4	5

あなたがカレーライスを「かなりすき」だったら、
上のように2のところに○をつけてください。

① まず、学年などについて書いてください。

1) 学校の名前……………()小学校

2) 学年……………(1. 4年 2. 5年 3. 6年)〈○でかこむ〉

20.6 38.8 40.6

3) 男女……………(1. 男子 2. 女子)〈○でかこむ〉

52.9 47.1

② あなたのたんにんの先生についておききます。

1) 先生は、あなたのことをどのくらい知っていると思いますか。

	よく 知っている と思う	わりと 知っている と思う	あまり 知らない と思う	ぜんぜん 知らない と思う
1. 仲よしの友だち……………	26.0	50.8	19.6	3.6
2. すきな食べ物……………	6.0	13.5	50.2	30.3
3. あなたのとくいな教科……………	24.7	40.9	27.0	7.4

	よく 知っている と思う	わりと 知っている と思う	あまり 知らない と思う	ぜんぜん 知らない と思う
4. すきなテレビ番組……………	5.8	7.9	28.7	57.6
5. 家に帰ってからの過ごし方……	5.0	16.0	39.4	39.6
6. あなたのなやみ……………	4.7	11.2	29.0	55.1

2) では、あなたは先生のことをどのくらい知っていますか。

	知っている	知らない
1. 先生の下の名前……………	90.6	9.4
2. しょくいん室の先生のつくえ の場所……………	67.2	32.8
3. 先生の家はどこ駅でお りるのか……………	24.9	75.1
4. 先生の家族の人数……………	43.4	56.6
5. 先生が小学校のころ、とく いだったスポーツ……………	18.8	81.2
6. 先生の出た大学……………	6.6	93.4

③ あなたのたんいんの先生は、どんな先生ですか。

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 休み時間、外で遊んでくれる…	3.3	13.0	30.5	53.2
2. じゅぎょう中、じょうだんを 言ってわらわせる……………	27.4	35.0	23.6	14.0
3. 給食のとき、子どものころの 話をしてくれる……………	6.3	15.6	31.0	47.1
4. 勉強をねっ心に教えてくれる…	34.1	43.8	17.3	4.8
5. 宿題をたくさんだす……………	23.7	25.6	39.1	11.6
6. 家で勉強したノートに赤ペン をいれてくれる……………	35.6	30.6	19.8	14.0
7. 先生の言うことを聞かないと、 きびしくしかる……………	24.5	36.4	32.6	6.5
8. 心ばいごとはいっしょに考え てくれる……………	15.9	31.8	33.5	18.8

● 資料1 調査票見本および集計結果

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
9. まちがえたとき、すなおにあ やまる……………	33.8	41.7	17.5	7.0
10. わすれ物をすると、きびしく しかる……………	18.4	28.5	41.0	12.1
11. ちこくや時間にきびしい……………	14.0	22.5	41.1	22.4
12. 何かきめるとき、話しあい 大切に……………	41.4	41.3	13.2	4.1
13. そうじや係の仕事さぼると、 きびしくしかる……………	26.9	37.0	30.0	6.1
14. 算数や国語のじゅぎょうを運 動会などの練習にかえてくれ る……………	17.8	34.8	31.1	16.3

④ あなたは、先生からつぎのようなことをしてもらったり、されたことがありますか。

	しょっちゅう ある	わりと ある	ときどき ある	今までに 1、2回ある	ぜんぜん ない
1. 先生からほめられたこと…	4.5	22.0	49.3	17.2	7.0
2. 「がんばったね」と言われ て、うれしかったこと……	5.4	20.6	32.0	21.4	20.6
3. 休み時間、外で遊んでく れる……………	2.7	5.6	10.4	15.5	65.8
4. 先生のほうからあいさつ してくれたこと……………	22.1	27.8	23.7	16.1	10.3
5. ほうか後、わからないと ころを一生けんめい教え てもらったこと……………	3.7	7.2	12.7	17.1	59.3
6. お手つだいをたのまれた こと……………	14.1	30.0	32.7	17.2	6.0
7. 休日、先生とみんなで遊 びに行ったこと……………	0.6	0.6	1.3	4.3	93.2
8. こまっていることを相談 にのってもらったこと……	3.9	7.2	12.8	21.7	54.4
9. 感げきするような話を聞 いたこと……………	4.5	8.2	14.9	23.4	49.0
10. 先生からつめたく、むし されたこと……………	5.6	4.6	8.0	20.1	61.7
11. きびしく注意されたこと…	9.0	10.4	19.9	33.4	27.3

	しょっちゅう ある	わりと ある	ときどき ある	今までに 1、2回ある	ぜんぜん ない
12. 先生がやくそくをやぶったこと……………	6.6	6.5	13.9	27.0	46.0
13. いくら手をあげても、さしてもらえなかったこと…	7.3	8.4	16.6	23.8	43.9
14. やりたくない係の仕事をさせられたこと……………	3.9	5.3	6.9	18.0	65.9
15. 先生からきずつくようなことを言われたこと……………	3.9	4.1	7.3	15.5	69.2

⑤ 今のたんになの先生になってから、自分はかわったと思うことがありますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. きらいだった勉強がすきになった……………	14.8	26.9	22.6	15.3	20.4
2. にかがだった鉄ぼうやとび箱ができるようになった……………	15.3	19.5	24.4	16.4	24.4
3. 食べ物にすききらいがなくなった……………	10.5	13.2	26.4	18.1	31.8
4. 家でよく勉強するようになった……………	11.5	26.3	24.6	16.5	21.1
5. 休み時間、外で遊ぶようになった……………	26.2	19.0	21.2	14.2	19.4
6. 学校に行くのが楽しみになった……………	19.5	24.5	26.8	12.3	16.9
7. クラスの友だちみんなが仲よくなった……………	25.9	29.0	22.5	12.4	10.2
8. 本を読むようになった……………	20.4	23.2	22.7	13.9	19.8
9. 時間を守るようになった……………	12.5	27.6	31.2	15.8	12.9
10. わすれ物をしなくなった……………	14.6	25.0	24.9	17.9	17.6
11. すきだった勉強がきらいになった……………	5.5	5.9	22.3	13.1	53.2
12. 勉強がわからなくなった……………	3.6	7.8	22.0	19.9	46.7
13. じゅぎょう中、おしゃべりするようになった……………	8.8	16.8	26.4	21.2	26.8
14. 先生がきらいになった……………	5.3	6.3	18.6	14.2	55.6

● 資料1 調査票見本および集計結果

⑥ あなたのたんにんの先生は、つぎのようなとき、どのくらいたよりになりますか。

	とても たよりになる	わりと たよりになる	あまり たよりにならない	ぜんぜん たよりにならない
1. 勉強のしかたがわからないとき……………	31.1	49.9	13.9	5.1
2. 成せきが下がってしまったとき……………	11.7	41.6	32.9	13.8
3. 学校に行きたくなくなったとき……………	16.5	32.1	27.9	23.5
4. 友だちにいじめられたとき……………	25.2	32.5	23.8	18.5
5. 中学受験 ^{じゅうがく} など、進路を相談したいとき……………	13.6	32.5	27.2	26.7
6. すきな男の子(女の子)ができたとき……………	3.7	10.5	24.7	61.1
7. 家出したくなるほど、親にしかられたとき……………	10.1	19.2	27.5	43.2
8. クラスの友だちとけんかしたとき……………	22.5	31.9	23.1	22.5

⑦ あなたのクラスは、どんなクラスですか。

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. わすれ物をしたとき、表やカードに記入する……………	27.4	13.8	12.7	8.4	37.7
2. チャイムがなって先生が来るまで、つぎの勉強の教科書を自分で読んでいる人が多い……………	3.0	8.8	12.8	31.5	43.9
3. じゅぎょう終わりのチャイムがなると、すぐ本やノートをかたづけの人が多い……………	30.2	31.9	14.5	14.5	8.9
4. じゅぎょう中、手をあげずに答える人が多い……………	21.9	38.0	18.1	14.2	7.8
5. 先生に「静かにしなさい」と注意されたら、すぐ静かになる……………	17.7	24.1	16.8	26.2	15.2
6. じゅぎょう中、となりの子やうしろの子とむだ話をする人が多い……………	26.1	37.4	20.7	12.1	3.7

● 資料 1 調査票見本および集計結果

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
7. しっばいすると「エー」と言ったり、わらったりする人がいるので発表しにくい……………	24.6	29.8	20.9	12.2	12.5
8. 体育のとき、先生が来るまでにじゅんぴ運動をすませておく……………	17.9	23.0	17.3	20.3	21.5
9. 先生がいなくても、そうじをねっ心にする人が多い……………	8.4	18.5	26.1	26.7	20.3
10. 係の仕事をしっかりする人が多い……………	12.5	27.3	28.9	20.7	10.6
11. 休み時間、先生のまわりにすぐ子どもが集まる……	13.4	19.0	21.9	20.7	25.0
12. 休み時間、教室でぶらぶらしている人が多い……………	14.5	27.7	22.8	23.6	11.4
13. 昼休み、「先生もいっしょに遊ぼう」ときそう人が多い……………	4.7	7.0	16.7	18.6	53.0

⑧ つぎのようなことについて、あなたはどのように思いますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 休み時間、クラスのみんなが遊んでいたら、その仲間に入る人が多い……………	28.8	40.1	19.2	7.9	4.0
2. 学級活動の話しあいするとき、自分の意見を発表する人が多い……………	14.4	32.9	23.6	22.5	6.6
3. 行事のとき、いろいろな人がクラスの代表になる…	13.3	27.3	27.4	22.9	9.1
4. 同じクラスの人がけんかをしていたら、とめに入る人が多い……………	16.4	28.2	23.8	18.9	12.7
5. グループ活動になると、いつもきまった人がグループになる……………	26.6	35.4	17.7	11.9	8.4
6. 係の仕事などをするとき、係いがいの人も協力してくれる……………	10.7	27.2	28.7	19.4	14.0

● 資料1 調査票見本および集計結果

⑨ あなたのクラスは、ほかのクラスとくらべてどう思いますか。

	とても そう思う	わりと そう思う	どちらでも ない	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. よく勉強するクラス………	8.7	23.4	36.0	20.4	11.5
2. 楽しいクラス………	54.1	29.5	8.5	4.3	3.6
3. じゅぎょう中、よく手を あげるクラス………	14.8	26.2	33.8	16.9	8.3
4. クラスのやくそくをよく 守るクラス………	7.7	20.2	33.5	24.9	13.7
5. 男女の仲がよいクラス………	11.6	16.6	26.4	22.0	23.4
6. よく運動するクラス………	28.8	30.5	24.8	10.7	5.2
7. まとまりがあるクラス………	11.3	19.5	33.9	19.1	16.2

⑩ あなたは、今のクラスになってよかったと思いますか。

とても よかった	わりと よかった	すこし よかった	あまり よくなかった	ぜんぜん よくなかった
40.6	29.8	18.5	7.1	4.0

⑪ あなたは、今のたんじんの先生になってよかったと思いますか。

とても よかった	わりと よかった	すこし よかった	あまり よくなかった	ぜんぜん よくなかった
40.5	27.9	16.9	7.9	6.8

⑫ あなたは、今のたんじんの先生の家遊びに行くことになったら、行きたいと思いますか。

とても 行きたい	わりと 行きたい	すこし 行きたい	あまり 行きたくない	ぜんぜん 行きたくない
36.8	18.1	20.8	11.5	12.8

⑬ あなたは、自分の結婚式けっこんに今のたんじんの先生をよびたいと思いますか。

とても そう思う	わりと そう思う	すこし そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
18.2	18.4	24.1	17.0	22.3

14 あなたの一番とくいな教科に、1つだけ○をつけてください。

1. 国語	2. 算数	3. 社会	4. 理科	5. 音楽
7.4	12.9	5.5	6.3	9.6
6. 図工	7. 家庭	8. 体育	9. 道徳	
15.0	8.5	33.3	1.5	

15 あなたは、学校に来るのが楽しみですか。

とても 楽しみ	わりと 楽しみ	すこし 楽しみ	あまり 楽しみでない	ぜんぜん 楽しみでない
25.4	32.6	24.3	11.2	6.5

16 あなたは、自分をどんなタイプだと思いますか。

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 仲よしの友だちが多い……………	26.2	48.7	21.5	3.6
2. 勉強がとくい……………	7.9	23.8	46.5	21.8
3. スポーツがとくい……………	24.8	27.7	31.1	16.4
4. きまりを守る……………	8.9	31.1	45.9	14.1
5. わすれ物をしない……………	14.2	30.8	37.4	17.6
6. 他の学級の人と遊ぶことが多 い……………	18.8	30.4	35.5	15.3
7. たんにんの先生にほめられる ことが多い……………	5.4	22.9	54.8	16.9
8. たんにんの先生にしかられる ことが多い……………	7.5	18.2	52.7	21.6

17 あなたの成せきは、クラスの中でどのくらいですか。

上の方	まん中より上	まん中くらい	まん中より下	下の方
10.2	19.5	42.3	18.1	9.9

～これで終わりです。長い間どうもありがとう。～

単位：パーセント

アンケートのお願い （教師用）

① まず、あなたご自身のことをお聞かせください。

1) 年齢 () 歳

30歳以下	31～35歳	36～40歳	41～45歳	46歳以上
19.3	19.3	28.1	19.3	14.0

2) 性別 (1. 男 2. 女)
58.9 41.1

3) 教職経験年数 () 年

5年以下	6～10年	11～15年	16～20年	21年以上
10.8	21.4	23.2	23.2	21.4

4) 出身大学 8.9 1. 短大
64.3 2. 4年制の教育系大学
26.8 3. 4年制のふつうの大学
0.0 4. その他

5) 結婚なさっていますか。

未婚	既婚 子どもあり	既婚 子どもなし	その他
19.6	69.7	8.9	1.8

② 教科指導についてお尋ねします。

1) あなたの専門の教科は何ですか。

国語	算数	社会	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	その他
28.5	17.9	12.5	8.9	0.0	1.8	5.4	0.0	14.3	0.0	10.7

2) あなたが一番力を入れている教科は何ですか。

国語	算数	社会	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	その他
44.6	23.2	12.5	5.4	0.0	3.6	0.0	0.0	7.1	1.8	1.8

③ あなたは、子どもたちとどのように接していますか。

	いつも そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 休み時間などに子どもと一緒に遊ぶ……	1.8	12.5	51.8	33.9
2. 厳しく決まりを守らせている……	5.4	46.4	48.2	0.0
3. どの子の学力も伸ばそうとしている……	39.3	60.7	0.0	0.0
4. 子どもの自主性にかなり任せられている……	5.4	78.5	16.1	0.0
5. 休日でも子どものことが気になる……	10.7	35.7	44.7	8.9

④ あなたは、クラスの子どもたちからどんな先生だと思われていますか。

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. おもしろい先生……	5.4	55.3	35.7	3.6
2. 子どもの気持ちをよくわかってくれる先生……	57.1	42.9	0.0	0.0
3. 決まりを徹底する先生……	7.2	46.4	46.4	0.0
4. 宿題をたくさん出す先生……	8.9	37.5	48.2	5.4
5. 勉強に厳しい先生……	10.7	48.2	41.1	0.0
6. 出張が多く忙しい先生……	3.6	26.8	57.1	12.5
7. 教え方がうまい先生……	3.6	35.7	57.1	3.6

● 資料2 調査票見本および集計結果（教師用）

⑤ あなたのクラスは、他のクラスと比べて、どんな特徴があると思いますか。

	とても そう	わりと そう	少し そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 笑いのある楽しいクラス…	13.0	62.9	18.5	5.6	0.0
2. 男女仲のよいクラス………	8.9	49.9	30.4	5.4	5.4
3. よく勉強するクラス………	3.6	35.7	26.8	33.9	0.0
4. 全員のまとまりのあるク ラス………	3.6	35.7	42.8	14.3	3.6
5. ルールの守られているク ラス………	1.8	28.6	37.4	30.4	1.8
6. 授業中に挙手の多いクラ ス………	1.8	17.9	35.7	41.0	3.6
7. 子どもたちが一生懸命勉 強するクラス………	3.6	32.1	35.7	28.6	0.0

⑥ あなたは、教師として自分自身をどのように評価していますか。

1) 全体的にみて、現在のあなたのクラスの教育や学級経営はうまくいっていると思いますか。

とてもうまく いっている	わりとうまく いっている	少しうまく いっている	あまりうまく いない	ぜんぜんうまく いない
1.8	41.1	42.8	10.7	3.6

2) あなたの教師ぶりを自己採点したとき、ふつうの教師を **60点** とすると、何点くらいだと思いますか。

100点	90点	80点	70点	60点	50点	40点	30点以下
0.0	3.6	16.1	32.1	35.7	7.1	3.6	1.8

3) では、あなたのクラスの子どもたちは、ふつうの先生を **60点** とすると、何点くらいつけると思いますか。

100点	90点	80点	70点	60点	50点	40点	30点以下
0.0	1.8	17.9	23.2	46.4	8.9	0.0	1.8

⑦ あなたは、ご自分をどんなタイプだと思えますか。

	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 明るく朗らかである……………	10.7	71.4	17.9	0.0
2. 子どもと一緒にいるのが楽し い……………	17.9	67.8	14.3	0.0
3. 同僚とうまくいっている……………	12.5	82.1	3.6	1.8
4. 人から頼られる方である……………	3.6	58.2	38.2	0.0
5. おしゃれである……………	1.8	32.1	42.9	23.2
6. スポーツが得意である……………	9.1	50.9	27.3	12.7
7. 学校以外の友だちがたくさん いる……………	7.1	46.5	44.6	1.8
8. 細かいところまで気にする……………	5.4	39.3	48.2	7.1
9. すぐに行動に移す方である……………	5.5	50.9	41.8	1.8
10. 何かにつけてよく心配する……………	3.6	44.6	46.4	5.4
11. 地道でコツコツ型……………	5.4	44.6	44.6	5.4
12. 家庭には仕事を持ち込まない……………	1.8	16.1	39.3	42.8
13. 趣味が多い……………	7.1	35.7	48.3	8.9

⑧ あなたが、学級経営で一番力を入れているのはどんなことですか。お考えをお聞かせください。

「表16 クラスの満足度」の中に記載 (P.24~26)

これで終わりです。貴重なご意見をありがとうございました。